

第三帝国の首都陥落

古是三春



1945年4月。2月の初めにソ連第1ベラルーシ（白ロシア）方面軍先鋒がオーデル川を渡河し、ベルリン東方わずか65kmのキュストリン付近に橋頭堡をきずいて、もう2カ月が過ぎていた。

2～3月にかけて、東部戦線ではボンメルンでの限定的なドイツ機甲部隊による攻勢が失敗し、その後のソ連軍の総力をあがせたボンメルン地方の掃討戦が続き、ドイツ東南のシュレジェンでは第1ウクライナ方面軍による攻勢でドイツ中央軍集団諸部隊は、チェコ国境へとおしつけられつつある情勢だった。

また、ヒトラーが戦機奪回を賭けたハンガリーでの攻勢作戦「春のめざめ」は、トルブーヒン大将率いるソ連第3ウクライナ方面軍の粘り強い反撃に破れ、タガのはずれたドイツ部隊はズルズルとろくな反撃もできないまま逃走し、オーストリアの首都ウィーンまでソ連戦車部隊に追いまくられていた。

★エルベ川東の電撃的制圧をめざすソ連軍

こうして4月初めには、ベルリン前面の戦線は、北はバルト海から南はチェコ国境まで、オーデル川にそって南北に一直線にひかれることになった。

この戦線にくつわを並べるのは、1944年夏期攻勢より全ソ連軍の先鋒を担ってきた第2ベラルーシ（ロコソフ

スキー大将）、第1ベラルーシ（ジューコフ元帥）、第1ウクライナ（コーネフ元帥）の3方面軍である。

このベルリン前面に布陣した総兵力250万のソ連軍による最後の大攻勢は、4月16日に開始されることになっていた。攻勢作戦の目標は、①ベルリン市の攻略・占領、②エルベ川東岸へのすみやかな到達の2つで、①の任務を第1ベラルーシ方面軍が、②の任務を第2ベラルーシ、第1ウクライナの各方面軍がそれぞれ第1ベラルーシ方面軍の北と南の側面を援護しながら達成することになっていた。

ソ連軍前線では、多大な試練を経てとうとうベルリン前面に到達したことで、将兵の意気は大いに上がっていた。攻勢準備は、かなりおおびらに行なわれ、攻勢発起点になる予定のキュストリン橋頭堡やナイセ川前面では兵力の集中が刻々と進んでいた。1～2月の攻勢が悪路で補給困難をきたした教訓から、今回は、各方面軍後方に舗装道路と鉄道が整備され、キュストリン橋頭堡にはオーデル川を越える本格的な鉄道橋梁もかけられた。各軍の補給倉庫も建設され、燃料・装備・弾薬・食糧の備蓄は、1ヵ月間以上の攻勢作戦を支えられる規模の量に達した。

攻勢準備のさなか政治将校たちは、将兵たちに「ファシストがわが国民に対してもたらした惨禍」について、



▲1945年4月中のベルリン占領を決意していたスターリン
 ▲キュストン橋頭堡からドイツ軍陣地へ突入するソ連軍部隊

統計資料をあげておおいに宣伝した。部隊毎にアンケートがとられて集計され、それぞれの兵士たちが家族にどんな犠牲を被ったか、また部隊全体ではどれくらいになるのかが発表され、中隊から連隊まで「ドイツ軍に支払わせるべき勘定書」を持たされるようにされた。

こうして、ドイツ軍撃滅の戦いはソ連の将兵一人ひとりととって、個人的怨恨をはらす戦いとみなされるようになっていったのである。

大いに意気あがる前線とは裏腹に、モスクワの最高司令官スターリンは、ひややかにドイツ中心部をはさんで接近しつつあるソ連軍前線と西側連合軍前線を見つめていた。彼にとって勝利は目前であったが、いまとなって最も重要なのは、戦後どのようなイニシアチブをソ連が握るかだった。多分に被害妄想的な性格のあるスターリンは、本気で「ドイツ軍がすすんで米英軍に道をひらき、ベルリン攻防戦のさなかにアメリカ軍戦車がとび込んでくるのではないか」と考えていた。

戦後の世界政治の中で、ソ連と自分の権威と影響力を絶大なものにするためには、何としても世界に惨禍をもたらしたファシズムの巣窟をソ連軍だけの手でしめあげなければならない。計算高いスターリンは、ライバルのヒトラーのように拙速に無理な攻撃をやらせるようなことはなかったが、ベルリン主攻勢作戦前線の南北の側面が3月いっぱいまで申し分なく確保されたとみるや、いかなる犠牲を払ってでも4月中にベルリンを陥落させ、エルベ川のソ連軍進出予定線に到達しようと決意した。

そして、4月1日、連合軍指導部あてに「ソ連軍の大攻勢は、5月半ば以降に開始されるでしょう。ベルリンは補助的な部隊によって攻略します」と、いささか虚偽に満ちた電報を打電したのだった。

★兵士たちの熱狂の中、一大攻勢開始！

4月16日未明、キュストリン橋頭堡前面で140基の対

空用サーチライトがいっせいにドイツ軍防衛陣地に向けて照射された。ジュコフ元帥が考案した「新式のドイツ軍攪乱戦法」だった。サーチライトの照射と同時に、攻撃準備射撃の猛火が塹壕のドイツ歩兵・砲兵を襲った。いつもの如く、1kmあたり270門もの高密度による二重弾幕砲火だった。ソ連第1ベラルーシ方面軍だけで1万6934門もの火炮がいっせいに火を吹く中、対するドイツ第9軍のわずか700門の火炮は、まったく太刀打ちしよ

ベルリン作戦参加のソ連軍部隊

第1ベラルーシ方面軍

(G.K.ジュコフ元帥
 司令官代理V.D.ソコロフスキー上級大将)

方面軍打撃集団 (ベルリン主攻部隊)

第47軍 第3軍 第3打撃軍 第5打撃軍
 第8親衛軍 第1親衛戦車軍 第2親衛戦車軍

側面援護攻撃集団

第33軍 第69軍 ポーランド第1軍
 集団直轄部隊

第9戦車軍団 第11戦車軍団 第7親衛騎兵軍団
 第16航空軍 第18航空軍 (航空支援)

第2ベラルーシ方面軍

(K.K.ロコフスキー元帥)

第2打撃軍 第65軍 第49軍 第70軍
 方面軍直轄部隊

第1親衛戦車軍団 第8親衛戦車軍団
 第3親衛戦車軍団 第3親衛騎兵軍団
 第8機械化軍団

第4航空軍 (航空支援)

第1ウクライナ方面軍

(I.S.コーネフ元帥)

第13軍 第28軍 第52軍 ポーランド第2軍
 第3親衛戦車軍 第4親衛戦車軍
 方面軍直轄部隊

第25戦車軍団 第4親衛戦車軍団
 ポーランド第1戦車軍団 第7親衛機械化軍団
 第1親衛騎兵軍団

第2航空軍 (航空支援)

※総兵力：兵員250万名 火炮・迫撃砲41,600門 戦車・自走砲6250輛 航空機7500機

ドイツ東部戦線の崩壊





ドイツ軍のパンツァー・ファウストによる攻撃を受け、被弾・炎上するソ連軍のT-34戦車

うがなかった。

砲撃開始直後、ソ連第3、第5打撃軍、第8親衛軍、第47軍の歩兵部隊が「ウラー」の大歓声をあげて突撃を開始した。ソ連兵たちは興奮のろつぽにあっただ。「いまこそ、長い戦争に終止符を打てる。かたきをとれる」という思いで全戦争期間でこれほど熱狂的だったことがないくらい、目標に向けて殺到しようとした。

ところが、この興奮状態がサーチライトの光明の強さあいまって、攻撃方向の喪失という混乱を生じさせ始めた。興奮した前衛の兵士たちは、手あたり次第に火器を発砲し、中には中隊ごと同士討ちを演ずる事態も続発した。

このような混乱は、夜明けと同時にさまたがったが、それまでに猛烈な攻撃準備射撃から立ち直ったドイツ軍守備隊の反撃を受けて、ソ連歩兵による攻撃はことごとく頓挫してしまっただ。

今回、ソ連軍が直面した防禦陣地は、1月のヴィッスラ（ドイツ名ヴァイクセル）川～オーデル川間の大攻勢時のものとは格段の違いがあった。戦線の最前衛に薄く防禦兵力をはりつける愚をヒトラーも悟り、ベルリンまでの60km間に三層の縦深のある陣地線を構築し、主兵力を第2線に配置してソ連側の出方をみながら逐次、適切な反撃を行なったのだ。

キュストリン橋頭堡を重視したドイツ第9軍は、その前面の防衛線3kmあたりに1コ師団を配置するという、前年までにもなかったような兵力密度をつくりだしていた。そして、およそ他の戦線やベルリン市内からも動員できる兵力を全てつぎこみ、ベルリン周辺には国民突撃隊もふくめて100万名以上の将兵を集めることに成功したのだ。

これらの将兵たちの平均年齢は40歳前後で、戦闘技術でも戦意の面でもおよそ多くをあてにすることができないものであったが、各地から集めた300万発ものパンツァー

・ファウスト（簡易対戦車無反動砲）で装備された彼らは、ときとして重大な損失をソ連戦車隊に与えたのだ。

★予想外の苦戦にジューコフ元帥、戦術を変更

ソ連軍の猛砲火の中、キュストリン～ベルリン間では激闘が続いたが、ベルリン東方のゼーロ高地に陣取ったドイツ軍部隊が頑として動かず、数次にわたるソ連軍の攻勢を撃退していた。ベルリン作戦の全体を調整する任務についたジューコフ元帥にかわって第1ベラルーシ方面軍の指揮をとっていたソコロフスキー上級大將は、スターリンのほとんど脅しに近い督戦をうけて、焦ったあまりに突破口もあかない戦線に突破機動兵力である第1、第2親衛戦車軍を投入した。

しかし戦車隊は期待も虚しくパンツァー・ファウストと高射砲でゼーロ高地を守るドイツ兵たちによって大損害を被り、はねかえされた。

計画では、作戦開始後6日でベルリンを攻略し、10～15日後にはエルベ河畔に出てアメリカ軍と手をつなぐことになっていた。しかし、作戦開始3日めの18日になってもベルリンを攻略すべき主力である第1ベラルーシ方面軍は、まだベルリンの門前まで半分の距離を残していた。

ソコロフスキー司令官代理は、次々と非常措置をとった。ポーランドやドイツの各地で解放された捕虜収容所にいたソ連軍捕虜までを投入したのである。公式には、スターリンの言明でソ連にとって「捕虜は裏切り者」として扱われることになっていた。このため多くの場合、捕虜収容所から出されたソ連兵捕虜は、そのまま内務人民委員部（NKVD）の隔離収容所に「罪人」扱いで収容されていた。

多くの元捕虜たちは、やせこけ、ぼろぼろの衣服のままだったが、小銃を与えられ「君たちの不名誉を前線ではらしたまえ！ドイツ兵に勘定を払わせて、晴れて原隊



第1ベラルーシ方面軍司令官G・K・ジュコフ元帥（左）と、第1ウクライナ方面軍司令官I・S・コーネフ元帥（右）

に復帰するのだ」と宣告され、突撃大隊に編成された。

彼らの多くは戦死したが、生き残った兵士たちはその後も活躍を続けた。とくにドイツ市民への略奪と暴行という形で活躍であった。

第1ベラルーシ方面軍が苦戦している状況下、その南の第1ウクライナ方面軍は順調に進撃していた。同方面軍は、ベルリン主攻部隊の南面を守り、一部兵力でドレスデン方面に進出し、そこでアメリカ軍と出会って南部に拠点をつくらうとするドイツ側の計画を未然に防ぐ任務を与えられていた。

すでに18日の段階でシュプレー川を渡河し、ドイツ第9軍と第4機甲軍の連結点に大穴をあけることに成功した同方面軍に対し、最高司令官代理のジュコフ元帥は「第3、第4親衛戦車軍の進路を北西に向け、ベルリン市内に南側から突入せよ」と命令した。これによって、第1ベラルーシ方面軍を苦戦させているドイツ第9軍の背後を突こうとしたのである。

コーネフ元帥は、この命令に大いに喜んだ。そしてさっそく攻勢の前衛に立っている第3、第4親衛戦車軍司令官、リュバルコとレリュシェンコ両中將に電話でベルリンへの突進を命令した。リュバルコは大はしゃぎで「同志司令官、ただちにベルリンを攻撃します！」と応答した。彼らにとっては、生涯の名誉となるベルリン攻略レースへの参加のチャンスが与えられたのだった。

★南面と北面から崩れるドイツ軍防衛線

ソ連第1ウクライナ方面軍主力の進路変更は、ドイツ第9軍を動揺させた。レリュシェンコ中將の第4親衛戦車軍は、ユーターボルクのゲーリング私邸（別荘）周辺に布陣したヘルマン・ゲーリング第2降下機甲擲弾兵師団を撃破し、ベルリン西郊のポツダム市をめざして急進した。

この間にジュコフは、ゼーロ高地南東に向けた新攻勢を第1ベラルーシ方面軍第3軍にとらせ、ベルリン守備隊とドイツ第9軍をつなぐ戦線を守っていたドイツ第



ベルリン市内で砲撃を行なうソ連軍砲兵

56機甲軍団を急襲させた。おり悪くヒトラーが同軍団に対し、ベルリン守備兵力の中心となるべくベルリン市内方面への引き上げを命じていたこともあって、同軍団は後退準備中を攻撃され、難なく撃退されてしまった。その結果、ドイツ第9軍西方から進出中のソ連第1ウクライナ方面軍第13軍と第3軍は、4月23日中に手をつなぎ、ベルリン南面をしゃ断することとなった。

ドイツ第9軍司令官ブッセ大將は、ヴァイクセル軍集団司令官ハインリキに対し、「私は長く前線に置かれすぎたようだ」と、包囲された状況が無電連絡した。

ちょうどその頃、ベルリン北面に投入されたソ連第2親衛戦車軍は、ベルナウ市を通過し、ハーフェル川に達してドイツ軍シュタイナー作戦集団とベルリンとの連絡を絶った。あわせて、第1ベラルーシ方面軍より数日遅れて攻勢を開始したソ連第2ベラルーシ方面軍は、弱体化したマントイフェル大將のドイツ第3機甲軍を撃退し、ヴァイクセル軍集団をズタズタに引き裂き始めた。

統率のきかなくなったドイツ・ヴァイクセル軍集団戦区では、戦意を失ったドイツ将兵の大量逃亡や投降が相次いだ。いまや、ヒトラー政府の威光は、ベルリン市周辺地域にしかなかった。ベルリン周辺では、野戦憲兵隊や移動軍法会議による恐怖政治が横行していたので、ドイツ国民突撃隊や守備兵にとって脱走は思いも寄らなかったが、それ以外の地域のドイツ将兵にとっては、すでに戦争は終わっていたのだ。

4月26日にマントイフェル大將は、ハインリキに対して「10万名近い兵士が西に向かって逃亡している…これをくいとめるには数百名の将校を必要としよう。ともかく戦争は終わったのだ、と兵士たちは言っている」と報告している。

★ソ連軍、ベルリン市内に突入！

4月20～21日にかけて、ソ連軍は各所からベルリン市街地に進入し始めた。ペルホロビッチ中将指揮のソ連第47軍とクズネツォーフ大将指揮のソ連第3打撃軍は、ベルリン北部から市郊外の第3防禦地帯を突破、20日午後1時50分、都心部に向けて初めての砲撃を加えた。

官庁街の占領を任務としたベルザーリン大将のソ連第5打撃軍は、シュプレー川に沿って東からベルリン市街に進入した。同軍の先鋒だった第266狙撃師団の砲兵隊は、官庁街を見渡せる高台にただちに砲列をしいた。

「そこからは大都市ベルリンが一望のもとに見下せた。喜びと感激がわれわれみんなを包んだ。そこは、敵への境界の一番終わりだった。敵に総決算をしてもらったときがきたのだ。そのとき自動車がそばに止まったのだが、だれも気づかなかった。車からでてきたのはベルザーリン司令官だった。われわれにあいさつすると大隊に命令した。『ベルリンのファシストに向かって、発射！』」

恐らくわれわれが、この時ほど速やかに、しかも正確に大砲を撃ち込んだことは、前にも後にもなかったように思われる。婦人衛生兵のマラニヤ・ユルチェンコが、次々に撃ち出される砲弾にチョークで次のように書き込んでいた。『スターリングラードのために』『ドンバスのために』『ウクライナのために』『孤児たちと寡婦たちのために』『母たちの涙のために』……

ベルリンを目のあたりにしたソ連兵たちは、ここに記



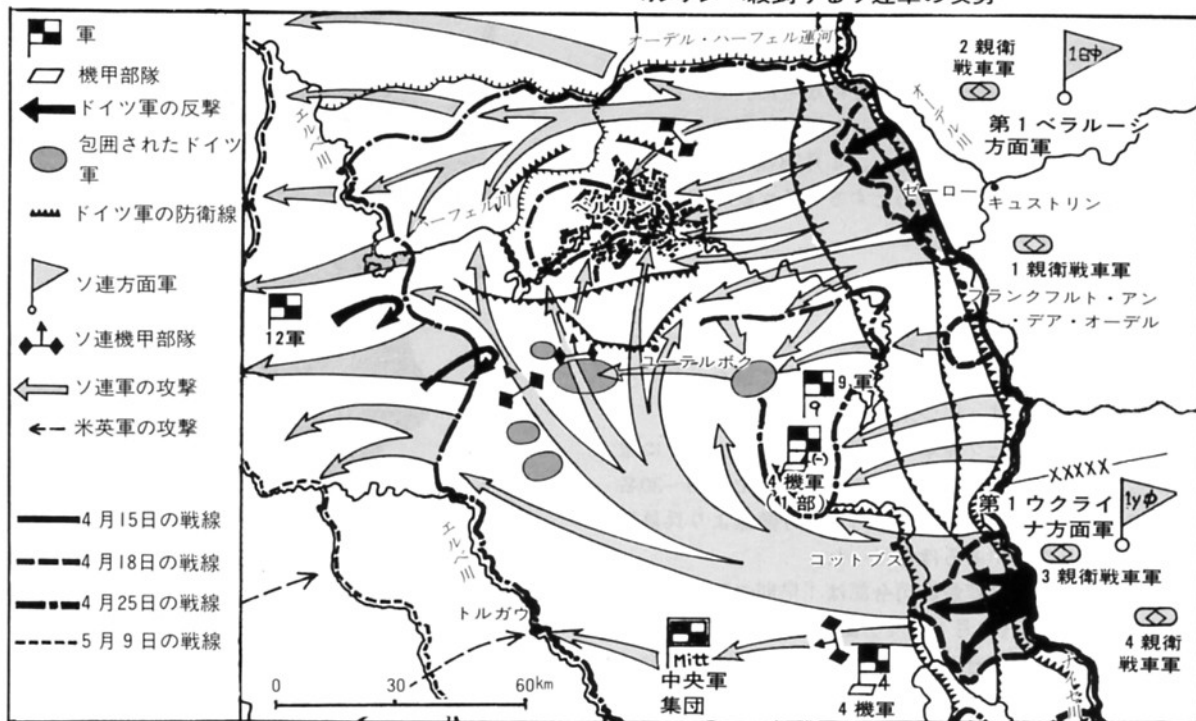
官庁街を目指してベルリン市内を突進するソ連軍歩兵

した回想の主、砲兵ニコライ・ワシリエフ曹長のように大きな感激に包まれていた。

しかし、もはや運命が決したとはいえ、ベルリンのような大都市はそう簡単には陥落しなかった。街区はひとつひとつが独立した防衛単位となり、それぞれに司令官が置かれて決死の戦いをソ連軍に対して挑んできた。

スターリングラード防衛の功労者チュエコフ大將率いるソ連第8親衛軍と、共同して攻撃するモスクワ戦の英雄カトゥコフ大將の第1親衛戦車軍の前面には、SSノルトラント機甲擲弾兵師団とミュンヘベルク機甲師団の残余がたちはだかっているにすぎなかったが、これら数十輛の戦車・装甲車輛に固まった数コ大隊程度の戦力が、国民突撃兵も活用した巧みな市街地防禦戦闘を展開し、ソ連軍の前進を阻んでいた。

当初、個々バラバラに市街地で戦っていたソ連歩兵と戦車は、攻撃前進のたびにそれぞれが大損害を出していた。ベルリンへ殺到するソ連軍の攻勢





ベルリン市内の目抜き通りを進撃するソ連軍のJS-2重戦車部隊

た。歩兵は交差点や堅固な建物基礎部分の開口部に設けられた機銃座、砲座の直射で制圧され、戦車はその視界の悪さを逆手にとって接近したドイツ対戦車兵の捨て身の肉迫攻撃・パンツァーファウストの射撃で次々に炎上させられた。ベルリン周辺で破壊されたソ連戦車は、800輦にものぼっている。

市街戦のベテラン＝チュイコフ大將は一計を案じ、スターリングラード戦時のような市街戦用小チームを麾下部隊と第1親衛戦車軍とで造りあげることにした。数輦ずつの戦車や数門の砲と歩兵、工兵を組み合わせ、互いにカバーし合いながら敵防禦構築物を一步一步破壊するという戦術をとったのである。

この戦術は、市街戦の定石であったが、功を焦るスターリンをしばしばいらつかせることになった。しかし、慎重に手探りで進むようなチュイコフ軍の戦術は、徐々にドイツ軍の防衛拠点を切り崩し、4月28日には、先鋒部隊が旧帝国国会議事堂を中心とするドイツ政府官庁街ブロックに到達することができた。

★難攻不落の官庁街

市内各所では、ソ連軍先鋒部隊が通過後も戦闘が続いていた。個々の堅固な建物や地下室に立て籠もったドイツ軍部隊との戦いは、いつ果てるともなく続いた。

官庁街に進出したソ連軍先鋒部隊の消耗は、とくに激しかった。1コ中隊あたり、生き残った兵士は20～30名程度で場所によっては攻撃側の方が、守備側より兵員数が劣っていることがあるほどだった。

しかしながら、ソ連最高司令部は「早期の勝利」を望んだ。「メーデー（5月1日『労働者の祭典』）までにベルリンを完全に制圧せよ。ただちに国会議事堂に勝利の赤旗を掲げよ」。一この厳しい命令の遂行を担う先鋒に

選ばれたのは、ソ連第3打撃軍第79狙撃軍団の第150狙撃師団だった。師団長シャティロフ少将は、第380狙撃連隊を訪れ、国会議事堂に立てるべきソ連国旗を第1大隊長ネウストロエフ大尉に託した。「君の大隊で、この赤旗を国会議事堂の上に立ててくれ」。

旧帝国国会議事堂を中心とする官庁街は、ベルリン市内でもっとも堅固な建物群である。各省庁の建物はそれぞれ数百名規模の守備隊が立て籠もり、とくに国会議事

ベルリン戦時のドイツ軍SS義勇兵



国会議事堂の守備に付いたSS第11師団ノルトランドのSS中尉。44年型迷彩服を着用している。

堂には周辺から後退してきた将兵もふくめて5000名近くが布陣していた。疲れきったソ連将兵の目に、硝煙の向こうの国会議事堂は、まるで巨大な幽鬼のようにそそりたっていた。

★攻防戦のクライマックス：国会議事堂陥落！

4月30日、ヒトラーが自決したまさにその日に国会議事堂への総攻撃が開始された。ソ連軍は先鋒部隊を援護するため、152mm榴弾砲、203mm榴弾砲をふくむ89門もの大型・中型野砲を国会議事堂のわずか200～300m前面にならべ、直接照準射撃で猛火を浴びせた。砲火が開かれると、先鋒のネウストロエフ大隊に続いていっせいに周辺の全狙撃師団部隊、連隊が突撃した。

突撃したソ連兵のほとんどが、赤い布や小旗を手にしていた。そして、攻撃して到達した地点で次々にそれらを柱や構造物に結び付けた。赤い花が次々にひろがるような景観で、ソ連軍にしては気のきいた演出だった。

しかし、議事堂に立て籠もったドイツ軍部隊は熱狂的に戦い、5月1日早朝、議事堂頂上にソ連国旗が立った後も降伏しなかった。

生き残りのドイツ守備兵約1500名が、ソ連軍に降伏したのは、ベルリン守備責任者でドイツ第56機甲軍団司令官ヴァイドリンク大将が、ソ連第8親衛軍司令部に降伏



国会議事堂の頂上にソ連国旗を立てるネウストロエフ大隊

を申し入れた5月2日になってからのことだった。

ソ連軍にとっては、輝かしいが血まみれの勝利だった。4月16日～5月8日間にベルリン作戦に従事したソ連3方面軍の損害は、旧ソ連の控え目な資料でも戦死・行方不明30万4887名で、アメリカ一国の全戦争期間の戦死者数を上まわったのである。

ベルリン市内に突入するソ連軍部隊

ベルリン戦時のソ連軍工兵



通常野戦服の上にテレグレイカを着用。P PSh43短機関銃を持つ。腰の短剣（ドイツ軍の銃剣）と胸の懐中電灯がベルリン戦時の彼らの装備の特徴。

